

2014年2月2日 礼拝メッセージ

聖書：ルカの福音書 17 章 11～19 節

説教：信仰があなたを直したのです

1 二重の苦しみ

1) ツアラアト

この箇所、ツアラアトという病に苦しんでいた人が出て来ます。以前は「らい病」と訳されていたことばです。けれども、聖書によればツアラアトは皮膚ばかりではなく、家の壁や布地にも現れる症状です。「らい病」と訳するのはふさわしくないだろうということで、あえて訳さずにそのままツアラアトとしたと聞いています。

二千年前のイスラエルにおいて、ツアラアト患者は汚れた者とされ、一般の人に近づくことは禁止されていました。12 節に「彼らは遠く離れたところに立って」とあるのは、そのような事情によるものです。

たとえ愛する者や家族、友人に会うことはできたとしても、互いに遠く離れて声を交わすだけ。手を握ることも、抱き合うこともできません。人の暖かさを求めても、かなえられません。今は「ハンセン病」の治療は確立していますが、当時はそうではありません。直る見込みはほとんどありません。どこに生きる希望があったのでしょうか。

2) サマリヤ人

この十人の人たちに関して、16 節にわざわざ「彼はサマリヤ人であった」と書かれていることに注意してください。サマリヤ人とはどんな人たちであったのか。

話はダビデの息子であるソロモンの時代にまでさかのぼります。ソロモンが死んだ後、間もなくしてイスラエルは北王国と南王国

とに分裂してしまいます。宗教的にも互いに相容れない態度を取ります。北王国はモーセ五書だけを聖書とみなし、ゲリジム山で礼拝することにします。一方の南王国は、北王国を宗教的に墮落した国と軽蔑し、自分たちこそ正当なイスラエル民族であり、エルサレムで礼拝することにこだわります。

それから何百年も経ち、イエスの時代になっても、昔のわだかまりは消えません。北王国の子孫はサマリヤ人。南王国の子孫はイスラエル人。常にその区別を意識します。イスラエル人は、自分たちのところには救い主は来るけれど、あの墮落した民族であるサマリヤ人のところに来るはずはないと堅く信じています。

この人たち。病のことだけではありません。救いについても差別を受けていました。

3) いやされる

この十人の耳にも、イエスのうわさは届いていたでしょう。イエスならば、もしかしてこの病をいやしてくださるかもしれない。そんなことも想像したでしょう。でも、二つの問題があります。イエスは生まれとしては南王国の子孫ですから、サマリヤ人と敵対するグループに属します。自分たちのところに来てくれる可能性はほとんどありません。たとえ来てくださったとしても、サマリヤ人は救われたいと言われてきました。イエスは何もしてくれないかもしれないのです。

ところが、イエスはサマリヤにへと向かわれます。まさに目を疑うとはこのことでしょ

う。可能性はゼロかもしれないけれど、とにかく願ってみることにしました。しかし、近づくことは許されません。遠くから声の限り叫びます。「イエスさま、先生。どうぞあわれんでください。」その結果、ツアラアの病に苦しんでいた十人は、祭司のところに向かう途中で完全にいやされました。

2 信仰とは？

1) 私たちは役立たずのしもべです

このことについて、イエスは19節でこう説明しています。「あなたの信仰が、あなたを直したのです。」彼らがいやされたのは、彼らの信仰のゆえであると言われます。

実は、信仰のテーマは少し前の5節のところから始まっていました。弟子たちはイエスに、「私たちの信仰を増してください」と願います。それに対するイエスの答えはこうです。10節。「自分に言いつけられたことをみな、してしまったなら、『私たちは役に立たないしもべです。なすべきことをしただけです』と言いなさい。」

何となく意味はわかりますが、でも具体的にどうすればよいのか。もう少し説明がないとわかりにくいと感じませんか。ルカは読者の気持ちをよくわかっています。10節の具体例が今日の箇所という順番になっています。では、どんなふうにつながるのか。二つのポイントに分けます。一つ目は、「役に立たないしもべ」とはどういうことか。二つ目は「なすべきことをする」とは何か。この二つです。

まず一つ目。「役に立たないしもべ」とは何か。

皆さんはこう思ったことはなかったでしょうか。「自分は良い人間ではないかもし

れないが、それほど悪い人間でもない。人をさげすんだり、冷たくあしらうようなことは、よっぽどでない限りしない。」

でも実際はどうか。たとえば、路上生活を強いられている人を見たとき、心の中で思いませんでしたか。「こんな汚い人がここにいるのは目障りだ。」生活保護を受けている方々にも、厳しい意見をぶつけます。「どうせ働く気もなく、役所をだましてお金ももらっているのだろう。」高齢になって介護を受けている方々を見て、いらだつ人もいます。なぜいらだつのでしょうか。「役立たず」と思うからです。この世は役に立つ人たちだけが住める楽園なのです。役立たずがこの楽園にまだいることが気に入らないのです。

ツアラアの十人が社会から隔離され追い出されたのは、衛生的な理由からだけではありません。彼らは、「役立たず」とみなされたからです。

すばらしい信仰者になりたと思うなら、「私は役に立たないしもべです」と思いなさい。この十人は、役立たずのしもべとしての資格を備えておりました。これが一つ目のポイントです。

2) なすべきことをしただけです

信仰についての二つ目のポイント。「なすべきことをしただけです。」なすべきこととはいったい何であったか。すばらしい行いでもしたのか。していません。そもそも役立たずと言われている人たちです。したいと願ってもできません。

それでも、彼らがしたことがたった一つだけありました。13節。「声を張り上げて、『イエスさま、先生。どうぞあわれんでください』と言った。」彼らがしたことと言えばそれだ

けです。

なんだ、簡単なことではないか。そう思える方は幸いです。むずかしいと感じる方もいるはず。だいたいこんな意見が出ます。「あわれみなど受けたくない。」「自分の力ではがんばれません。」「苦しいときの神頼みだなど、身勝手ではないか。」「頑張り屋さんに多い意見です。表現は違いますが、ひとことで言えば、自分が役立たずであると認めたくない。いつまでも自分は役立つ人間でなければならぬ。そう思いたいのです。立派なことだと思います。でも、いつか必ず壁にぶつかる時がやってきます。そんなとき、言っているのです。頼っているのです。「もうだめです。神さま。私をあわれんでください。助けてください。」

敗北でしょうか。いいえ。イエスは言われます。「あなたの信仰が、あなたを直したのです。あなたの信仰はすばらしい」と、言ってくださいます。

3 あなたの信仰があなたを直した

最後に一つのことに触れておきます。17、18節。「十人きよめられたのではないか。九人はどこにいるのか。神をあがめるために戻ってきた者は、この外国人のほかには、だれもいないのか。」

ここを読んで皆さんはどう思いますか。折角いやしてくれたのに、感謝もしない。イエスは九人が戻ってこなかったことを嘆き、非難しているように聞こえるかもしれませんが、そうではありません。これで良かったのです。

イエスはなんと言われましたか。「自分に言いつけられたことをみな、してしまったら、『私たちは役に立たないしもべです。なすべ

きことをしただけです』と言いなさい。」

このことばはイエス自身のことでもあります。病に苦しむ人をいやす。イエスにとってそれは「自分に言いつけられたこと」をしただけに過ぎません。イエスは、ご自分のことを「役に立たないしもべです」と言われます。それなのに、九人戻ってこなかったからと言って、怒り出すのですか。そんなはずはありません。

自分のことをふり返ってみましょう。皆さんも神に助けられたこと、恵みを受けたことが沢山あったはず。本来なら、神の所に戻って「ありがとうございます」と足もとにひれ伏すべきでした。けれどもいつの間にか感謝を忘れてしまいます。そもそも何を感謝すべきなのかさえわかっていない。そんな私たちではないですか。でも神は嘆きません。怒りません。そんな私たちでもまったく問題にしません。

そもそも主はなんと言われましたか。「あなたの信仰が、あなたを直したのです。」もちろん直して下さったのは主です。けれども「わたしがあなたを直した」とは言いません。なすべきことをしたらそっと舞台の袖に隠れてしまいます。隠れてしまうのですから、私たちが気がつかないでいたり、忘れてしまうのはある意味では避けられないことなのかもしれません。

困ったときの神頼み。世間では、そんなのは信仰ではないとも言います。そうかもしれませんが、主は言われます。どんな動機であってもかまわない。助けてほしい。自分は苦しいのだ。救ってほしい。自分はあわれな存在だから。そう思う者は、誰であっても神の救いを受けることができる。そう言ってくださいます。

神にとって、桑の木が海の中に植わることなど、ほとんどどうでも良いことです。自分は役立たずになってしまった。助けてくださいと願う者が救われていくこと。神にとってそのほうが最も大切なのです。そのためには、ご自分のいのちを捨ててもかまわないとお考えになります。ご自分のいのちを捨てても、なすべきことをしただけですと、言って身を低くされる方です。